

Title	「インワ時代」(その三)
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 25 p.1-p.27
Issue Date	1971-07-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80404
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「インワ時代」(その三)

服 部 正 一

“In:wa Period, III”

by Masaichi Hattori

နိ ခါန်း

န မေတ္တဿာဂဝ တောအရဟတောသမ္ဘာသမ္ဘုဒ္ဓဿ

(ဂဏှတို့) ၂၂-တွဲ၌ ရေးသား ခဲ့ပြီး ဖြစ်သော "အင်း ဝ ခေတ်" (ဒုတိယစာစောင်) နှစ်အဆက်ရှိဆက်လက်၍ "အင်း ဝ ခေတ်" (တတိယစာစောင်) ၌ ကျယ်ပြန့်စွာ ဖော်ပြပါဦး မည်။

ဤစာစောင်၌ ရေးသား ရမည်ကား မိုး ညှင်း မင်း နန်း တက်ခဲ့သော မြန်မာသက္ကရာဇ် ၇၀၀ (အေဒီ ၁၄၂၆) မှ စ၍ ၁၇-ဆက်စဉ်သု ကျော်ထင် နရပတိအုပ်စိုး နှစ် ၃-နှစ်အကြာ၊ ၉၁၆-ခု (အေဒီ ၁၅၅၄) တွင်၊ တောင်ငူဘုရင်တပင် ရွှေအင်း နှင့်ဘုရင် နောင်တို့သည်၊ အင်း ဝ ကိုတိုက်ခိုက်သိမ်းယူ၍၊ နရပတိကိုဖမ်းယူပြီး သည်အထိ နှစ်တိုင်တိုင် ၁၂၀၈ ကြာတွင် မြန်မာပြည်၌ ဖြစ်ပေါ်ခဲ့သော အကျိုးအကြောင်း များကို ပြုစုရေးသားပါမည်။ ထိုအတောအတွင်း ၌ ရှမ်းလူမျိုးများ အခိုက်အတန့်မျှသာ အင်အားကြီး မြန်မာလူမျိုးများ ကိုဖိနှိပ်ချွတ်ခြယ်ဟန်လက္ခဏာရှိလေသည်။ ထို့ကြောင့် မြန်မာမျိုးရိုး တနွယ်တည်း ဖြစ်သောမင်းမျိုး ရေ ၁၀၀၊ လူသာမန်များ ပါမြန်မာမင်းမျိုး အုပ်စိုးနေသော တောင်ငူမြို့သို့ မပြတ်မလပ်ခိုကိုးစပြုခဲ့သည်။ မကြာမှီအတွင်း တောင်ငူမြို့၏လူဦးရေတိုးပွား နှစ်ကား သောမြို့စောကြီး ဖြစ်သွားလေသည်။ တောင်ငူမင်းဆက်အကြောင်း မှာကား နောက်ထပ်ရေးသားရမည်ဖြစ်သော (ဂဏှတို့) အတွဲ၌ အကျယ်ဖော်ပြရန် စိတ်ကူးနေပါသည်။

ဤခေတ်ကာလအတွင်း ၌လည်း အရင် (ဂဏှတို့) အတွဲတွဲ၌ ဖော်ပြခဲ့သကဲ့သို့ မြန်မာ-ရှမ်း-မွန်တို့လူမျိုးသုံးမျိုးသည်ကား ဆက်လက်၍ အင်အားတိုးစေခြင်းငှါ အချင်းချင်း အစွမ်းကုန်တိုက်ခိုက်ကြလေသည်။ အထူးသဖြင့် ရှမ်းလူမျိုးများ တမြန်မာပြည်လုံးကို ရှမ်းမျိုးများ တပေါင်းတည်း အုပ်စိုးရန် ရည်ရွယ်၍ ၎င်းဆန့်ကျင်ဘက် လူချေသည်ဟုယူဆနိုင်သည်။ ထို့ပြင် တရုတ်တို့ကလည်း အင်းဝကို ဝင်၍ နှောင့်ယှက်လာတတ်၍ ၎င်း၊ ရခိုင်ပြည်နှင့်လည်း တိုင်းရေးပြည်ရေး အကြောင်း အတွက် စေ့စပ်မှုတွင် ၎င်း၊ အခက်အခဲများ အမျိုးမျိုး ပေါ်ပေါက်ခဲ့လေသည်။ ဤခေတ်အဆုံး ၌ အင်း

ဝဏ်အင်အား သည် နိဇ်အင်း ရှ်အင်း ဝကိုအုပ်စိုး ခဲ့သော မြန်မာမျိုး မင်း
ဆက်ပျောက်ကွယ်ခြင်း သို့ရောက်ခဲ့လေသည်။ အင်း ဝမြို့မှထွက်ခဲ့သော
မြန်မာမျိုး နှင့်စပ်ဆိုင်သောလူများ သည် တောင်ငူသို့ရွှေ့ပြောင်း သွား
ပြီး ဖြစ်ရန် ယေဘုယျအား ဖြင့်ခေတ်ဝေတံသမုတ်ကြသော "အင်း ဝ - တောင်
ငူခေတ်" သို့နီး ကပ်ရောက်ပေါက်လေသည်။

သို့ရာတွင်အခြား တဘက်ကဆိုသော် ဤခေတ်ကာလတွင်အထူး သဖြင့်မှတ်
သား ရမည့်အကြောင်း အရာမှာ ပုဂံခေတ်၌ စဇ်တဖြေး ဖြေး တိုး တက်
ရန်လုံ့လဝီရိယစိုက်နေကြလျက်ရှိရာ စာပေအတွက်သွက်လက်သောလှုပ်ရှား
မှုများ ပေတိလာကာမြန်မာလူမျိုး များ သည်အမျိုး သား စာပေပေတိ
တွင်နီး ကြား စပြုခဲ့ခြင်း ဖြစ်လေသည်။ သို့ဖြစ်ခြင်း ကြောင့် ဤခေတ်၌ အ
လွန်မြတ်သော စာဆိုတော်များ စွာ ပေတိထွန်း ရှိထူး လွန်သောကဗျာ
လင်္ကာတိုး တက်ကြောင်း ဖြော် မှန်း နိုင်ပေသည်။

ま え が き

前号22号の「インワ時代（その二）」に引き続き、本号「インワ時代（その三）」では、インワ朝モーニン王家のモーニン・ミンタヤーの即位した1426年よりインワ王朝17代シートウ・チャーティン・ナラパティがハントワディのバインナウンのもとへ送られる1554年までの128年間のビルマを描く。その間、一時はシャン族の勢力が強くなり、ビルマ族に対する圧迫もあって、ビルマ系に属する王家をはじめ庶民に至るまでビルマ族が支配するタウンゲーへ続々と避難を開始する。タウンゲーの町は人口が増加するに従って、いやが上にも繁栄を極めるのであるが、タウンゲー王朝については次の号にゆづる。

さて、この時代においても前々号より続いているビルマ——シャン——モンの三民族は各々勢力増強のために鎬を削り、殊にこの時代ではシャン族が全ビルマ統一を企てんとする野望がうかがわれる。また、ビルマ側に対する中国軍の干渉があり、アラカン国との交渉もある。この時代の末期にはインワの勢力も衰微に傾き、遂にはインワ朝におけるビルマ王家の断絶にまで至り、ビルマ族はタウンゲーへ移って行き、所謂インワ・タウンゲー時代に近づいて行く。

しかし、一面においてこの時代に特に注目すべき点はパガン時代にはぐくまれた文学活動がようやく実を結び、ビルマ人がその国民文学に目ざめてきたことであって、すぐれた文豪の現出する時期となるのである。殊に詩の分野において大いなる発達を期待し得る時代である。

インワ第二期王朝モーニン王家7代

ミンダーゾワソーケよりチェタウンニョーまでのインワ第一期に続いて、インワ第二期王朝はモーニン・ミンタヤーデーよりシュエナン・チャーシン・ナラパティまでの7代、即ち、モーニ

ン王家7代が約100年間に渡ってインワを支配する。

Mō:hnyin:Min:tayā: モーニン・ミンタヤー (1426～1439)

カレーチェタウンニョー (学報22号, 32～33頁) の死後、モーニン・ミンタヤーが王位に即いた。彼はパガン王家のナラパティ・シートゥ王 (学報17号, 70～80頁) の子孫であると云われている。モーニン・ミンタヤーの時代にタウンゲー、タウンドウイン、ヤメディン等の地方では反乱が相次いで起きていた上に、シヤン州をも適当に支配してゆくには困難であったので、インワの勢力もやや衰えの徴候を見せていた。しかし、反乱の気配を示す地方を息子たちと共に鎮圧せんとして軍を進めつつ、パカンのタヤービヤーを圧して、モン族の王女シンソーブを迎え、また、その後、シュエセッドーにいたシンボメ (学報22号, 30頁) をも彼の妃にした。

タウンゲーとの関係

タウンゲーはシッタウン河の流域に位置していて、上ビルマと下ビルマとのほぼ中間にあったので、ビルマ族とモン・タライン族との間の緩衝地帯となっていた。イラワヂ河の岸辺よりは遠ざかっていたので、機を見てインワに対し反抗する気配があった。ウ・ミンハンの記述よりその一例をとれば (p.209), 当時、タウンゲーの町を支配していた Sawlū : Thinghkayā ソールー・ティンカヤーはインワのモーニン・ミンタヤー王とは幼な友達であり、宮廷に仕えていたのも同じ頃であったので、互いに親しみ深く、王の寝台の上でよく話し合う間柄であったが、親しみのあまり彼は王にしばしば反抗の態度を示した。しかし、ソールー・ティンカヤーは1436年に世を去った。ベニスのイタリア人 Nicolo di Conti がイラワヂ河沿いにその地に到達したのはソールー・ティンカヤーの時代であった。Nicolo di Conti については次回の号にて後述する。その後、ソールー・ティンカヤーの養子ウザナーが約1年タウンゲーを治めたが、タライン王ビニヤー・ランはウザナーを廃位し、ソールー・ティンカヤーの息子ミンソーウに支配させた。インワに対するタウンゲーの反抗的態度はその後も続けられて行ったが、将来の大きな問題をはらんでいた。

暦の改正

パガン時代にパガン王朝第20代目のポッバー・ソーヤハン (学報12号, 105頁) はパガン暦を作り、今やその800年を数える時、インワ王朝のモーニン・ミンタヤー王が2年を切捨てて、その年を798年として暦を改正した。この暦は国の平和、人々の幸福を念願して改正されたものであって、Hm. Yaz. Vol. II, p.85によれば、"ဝၚ်းဒ်ဒ်ဖျါ" と呼ばれる。That-pon-Abhidhān, p. 480 では、"ဝၚ်းဒ်ဒ်ဖျါနိဒ်" と記されているが、それによって解釈すれば、ဝၚ်း-ဝၚ်း-

၇၈၈၁၅၆ ခု (8 種の宝) + သိခြင်းသိဒ္ဓါ = အပေါက်ကိုး ခု (9 種の道) + မုနီ = တရား တူငယ် မုနီရန်ခံခြင်း၊

(7 種の比丘) であって、従って、 ဝဿသိခြ်မုနီ を逆に読んで、 မုနီသိခြ်ဝဿ と置き換えれば、 ၇၉၀ (798) 年を意味することになる。

しかし、人々はその曆に従わず、従前通りパガン曆を使用し続ける人が圧倒的に多かったの
で、この曆の改正は成功しなかった。この曆は短曆と呼ばれ、パガン曆は長曆と味ばれた。その
後、曆の改正を企てた王はいない。従って、現在ビルマ人が使用しているものはパガン曆であ
って、ビルマ曆と言え、パガン曆を指すのである。

モーニン・ミンタヤー王の善政

モーニン王はオンバウン、ヤッサウ、ナウンモン等のシャン諸州と相提携することによって成
功し、先見の明をもった王として有名である。王は一般庶民のため、特に下々の人々の生活に意
を用い、種々の善政を施したことについてウ・ボチャは次のように述べている。(146頁)

モーニン王はよく仏典に通じ信仰心の篤い人であり、賢者たちの言葉に耳を傾けた。パゴダや
寺院を数多く建立し、また、古い宗教的建築物を修築した。彼が特に力を入れたことは彼自身の
財産は勿論、大臣高官たちにも信仰心をもって財宝を寄進させ、インワ及びパガン周辺の町々に
住む売春婦たちのうちでその職業に気の進まない者にそれ相当の金銭を与えて正業に就かしめ
た、ということである。また、王の妾たちのうちで、ある男と不義があった場合、王は彼女を罰
せず、心よく結婚を許した。尚また、盗人や流賊たちについても、彼らを処刑することは極力避
け、訓戒を与えて自由の身にしてやったことがしばしばであった。このように善政を行い、王位
にあること13年にしてビルマ曆801年(西曆1439年)この世を去った。

Min:yèkyawzwā (1440—1443)

モーニン・ミンタヤー王の長子モーシュエザー (Mō: shwezā:) はミンイエーチョーゾワの号
を受けて王位継承者に任じられていたので、父の後を継いで王位に即いた。折しもカレー、モー
ニン、タウンドウイン、タウングー等の地方ではインワに対し反抗の態度を示したので彼らを鎮
圧占領し、それぞれの地方に領主を置き、パカン・タヤービヤーダーの息子にタヤービヤーの号
と共にタウングーを与えた。その後、ミンイエーチョーゾワはモーガウン地方に侵入した際没し
た。彼はミンガウン王の子でモン族のヤーザードリ王と戦って戦死したミンイエーチョーゾワと
はもちろん同名別人である。

ナラパティ王 (Narapati, 1443—1469)

ミンイエーチョーゾワが亡くなったので、その弟でプロームを支配していたティハトウがナラ
パティという名によって王位を継いだ。

当時インワの近隣にはインワに対し反抗の態度を示すものが多く敵として戦わねばならないものが若干いた。例えば、モーシャン族がその一つである。1444年、モーニンの領主ティハパテによってモーシャン族の長ソーガンボワ（ ဝေဝဲဇံဝဲ=အိုဇံဘဲ ）がその家族たちと共に捕えられ、インワへ送られてきた。その土侯は中国（雲南）とは不仲であり、中国軍もまた彼を攻めていたので、ソーガンボワを逮捕せんとして度々ビルマ側へ侵入した来た。そこで、ウ・ミンハンの記するところによれば（p. 213）、ナラパティ王は彼自身バーモ及びカウントンの町まで軍を指揮して中国軍と戦い、それを反撃したので中国軍はモーウォンへ撤退した。中国軍は最初敗北を喫したが、二回目には大軍を以て攻め、北方のアウンピンレー・カンドウインよりタウンピョンまで、また、西はイラワヂ河まで、南はメッカヤー河附近まで達した。遂に中国軍がインワの都近くへ進んできたが、折しもビルマ国内でも不穏な状態であったので中国軍をよく防ぐことができず、その上、ヤメディンからミンゲ・チャーティンがインワに反抗してきたので、ビルマ側はソーガンボワの引渡しを条件として中国軍に援助を要請し、それを征服した。しかし、彼を中国軍に引渡す直前にソーガンボワは毒をのんで果てたので、彼の死体をのみ中国軍に引渡さざるを得なかった。この戦役は、実際には、中国軍とビルマ軍との戦いではなく、中国軍に敵対していたソーガンボワ引渡し事件に過ぎなかった。

1445年に、王は次男息子にミンダーゾワの称号と共にプロームの町を与え、末子ミンガウンゲにタウンゲーを与えた。

当時、ペグーにおいてはビンニヤー・ダンマヤーザーが毒殺され、王位継承者と認められていたその弟ビンニヤー・ランが王位に即き、末弟ビンニヤー・チャンをそのままマルタパンの太守としてとどまることを許したので、彼はそこでほとんど独立した権力を振った。またその州は多年ペグー王には名目上の従属関係にあって、その後継者によって統治されていた。

1446年、殺害されたモン族の王ビンニヤー・ダンマヤーザーの息子* ビニヤー・チャンは彼の叔父ビンニヤー・ランの* 怒りにふれ、叔父が処刑しようとした時、彼は遁れてビルマ側のナラパティ王のもとに身をかくまわれた。

*ビンニヤー・ダンマヤーザーの末弟であるビンニヤー・チャンとビンニヤー・ダンマヤーザーの子であるビンニヤー・チャン（在位1449～1452）とは同名別人であることに注意。

*叔父ビンニヤー・ランの怒りにふれた理由は、ウ・オンマウンによれば、ビンニヤー・チャンが一人の側室と密通したというので、彼を処刑しようとした（U On: Manng, p. 86）、と記されている。

ナラパティ王は彼に同情し、サリンの町を与えた。その年、ハントワディ国においてビンニヤー・ランが亡くなり、王位継承者であったシンソーブの子に当るビンニヤー・パルー（1446～1449）がその後を継いだ。

ビンニヤー・パルーは彼の母シンソーブに似合わず残忍で知られていた。1449年に* ビルマ軍はビンニヤー・パルーを撃ってビルマ王ナラパティのもとにかくまわれていたビンニヤー・チャンをハントワディの王位に即けた。その翌年ミンゲ・チャーティンがタウンゲーを占有した。

ナラパティ王は増大しつつある勢力を以て多くの敵を制圧したので地方の豪族たちは自然に彼に敬意を払うようになった。

*ウ・オンマウンは、ビニヤー・パルーはビニヤー・チャンの部下たちに殺害された、と述べている。(p.87)

ナラパティ王の事績

ナラパティ王は Yāzadhan「王の十戒」(学報18, p.78)をよく守り、信仰の篤い人であった。彼はサガインにトウバヨン・パゴダ (Htūbayon Zedidaw) を建立し、そこに傘を奉納した時、インワよりサガインへ至る間のイラワヂ河の上に渡して大橋を建造し、多数の僧侶、大臣、高官、王家一族、兵士たちと共に王はその橋を渡った。それはウ・オウンマンによれば (Vol.2, p60,) 上述の対中国との戦闘の際に経験したことであるが、雲南国境に接したモーガウン地方へ至る道路を容易に通過し得るためには首都インワよりサガインに達する大橋を設けることであった。その最初の建造を完成したのは1449年であった。しかし、チーク材にて造られたその大橋も1466年に崩れ、同年サガインにトウバヨン・パゴダが完成したので、傘の奉納式へ4ヶ部隊(象隊、騎兵隊、戦車隊(タンクではなく、chariot)、歩兵隊)より編成された軍隊を進めるために、最初のものより一そう堅固な橋が建造された。その後、巨額を費して建造した第三番目のインワ大橋をアマラプールの町の南端にある* シュエ・ヂェッイエッ・パゴダの近くよりサガインの町の方へ渡すように造られたのはビルマ暦1295年のピーゾーの月の3日(西暦1934年1月2日)であって、その発会式は大祝典を以て行われた。

*Shwe-Gyet-yet の語源について、「ビルマ民族誌」p. 653に次のように述べられている。Dhamma-zedi (学報22号31頁参照)は前世において為した功德のためにすばらしい力をもっていた。この力によって彼は、ある日、彼の師匠であったバメソダ師の前に出された大皿に盛られていた熔られた鶏を蘇生させることができた。こうした事情のために、鶏が引っかかり廻して食物をあさったその場所は、今日に至るまで Shwe (虚字) + Gyet (<kyet=鶏) + yet (鳥などが地面を引っかく) と呼ばれている。

上述の理由でナラパティ王は別名 “Htūbāyon Dāyakā Min: tayā: gyī:” としても有名である。トウバヨン・パゴダは現在ピョー・パゴダ (Pyohpāyā:) として知られている。(ウ・ミンハン, p.215)

タウンゲーとの関係

ナラパティ王がその末子ミンガウンゲをタウンゲーの太守に任じたことは前述の通りであるが、1451年ミンゲ・チャーティンがミンガウンゲを亡ぼして反旗を翻えた。そして1458年にミンタンズイーがミンゲ・チャーティンを亡ぼした。そこでナラパティ王は息子である王位継承者ティハトウをしてタウンゲーを占領せしめた。

1454年、アラカン国王アリカン (Alikhan, 本名 Sarika) と同盟を結ぶために、ポーガウンヌエ・チャータウンに小屋を建て、王一族をはじめ大臣高官たちを引き連れて、そこで会合した。

両国の王は互いに誠実と尊敬心を以て誓い合い、ポーガウン山脈をアラカンとビルマの国境に定めた。

ナラパティ王の最後

その後、かつて孫に当たるタドー・チャー (Thadō:kyaw) に対し、王は立腹して彼を打った。その理由は、タドー・チャーが叔母の長女に当たるサガイン王女と秘かに恋におちているのをナラパティ王は厳しく訓めたが、彼は聞き入れず、ひそかに密会を続けた、というのである。タドー・チャーは感情を害し、ある夜、約300の従者を引きいて祖父を襲い、その屋敷に火を放った。ナラパティ王はプロームを支配している次男息子ミンデーゾワのもとへ逃れたが、その時ヤーザーティンジャンと彼の長子パウラが船にて王を送った。プロームに達すると、ナラパティ王は傷の痛みのためこの世を去った。

パウラ (Paukhla)

ナラパティ王がプロームへ避難した際、Hm. Yaz. (Vol.2, p.108~109) の記録によれば、王に従っていたのは豪勇ヤーザーティンジャンとその子パウラ及び彼らの従者たちであった。プロームの領主ミンデーゾワはプロームに達したヤーザーティンジャン父子の武術に秀でていたことを以前より聞いていたので、彼らの腕前を試したいと思って、彼らに槍試合を挑んだところ、ヤーザーティンジャンは黙して応じなかったが、息子パウラは領主の挑戦に応じた。領主はガヤーフ象に乗り、パウラは馬に乗って槍試合を行った。領主は誤って自分の象の足に槍を突き刺したので、象は痛さのためそれ以上前方へ進めなくなったのを知り、ヤーザーティンジャン父子は従者と共にそのままインワへ引上げたが、領主は大いに腹を立て、兵士たちにパウラを追わせた。パウラは途中で追ってくる兵士たちの前でカニン樹の大木を槍で突き刺すと樹は真二つに割れた。それを見た兵士たちはとても彼には齒が立たないだろうと諦めて、引きあげて行った。領主はパウラを捕えることができなかったので、部下の腑甲斐なさを恥じて、彼らの長を処刑した。

Pyisun Thihathu (Mahā Thihatur, 1468~1480)

ナラパティ王の死後、彼の息子で王位継承者であったティハトウがプロームより上都して、1468年に MahāThihathu(r) の名によってインワの王位を継いだ。彼は後ビルマ史にて Pyisun Thihathu の名で知られた。Pyisun Thihathu という名の由来については後述する。ピースン・ティハトウ王はその勢力が最高頂に達した頃、父王の時代にタウンゲの太守に任じられていた Let-yāzeya Thingyan レッヤーゼヤ・ティンジャンがタライン族の女王シンソープ (学報22号, 30~31頁) の援助によってインワに対して反乱を起したので、王は軍を進めてタウンゲを占領し、王の気に入りであったニヤウンヤンの太守シートウ・チャーティンにタウンゲを支配させた。

その後、シートウ・チョーティーンはタウングーの町が狭いので町幅を拡張したところ、インワの都では王子、大臣高官たちはそのような町幅の拡張は彼に反乱の気配があるのではないかということを王に言上した。ティハトウ王はチョーティーンを信じていたので、その証拠として一人の従者にタウングー領主の髪をつかんで連れてくるように命じた。王の命令であることを聞かされたタウングーの太守はそれに応じ、屋根の上から飛び降りよ、と言われればその通りにする、と言ってそれを実行し、王に対して反抗する意志なきことを示した。そのようにして王子や他の人々にその証しを立てた。そこで人々は今更ながらインワに対する彼の忠誠を讃めた。

ティハトウ王は彼の長男 Nawyahtā ノーヤターを王位継承者に任じ、次男* Thadō:kyaw タドー・チョーをサリンの太守に、そして末子 Min:yèkyawzwā ミンイエー・チョーゾワをヤメディンの太守にそれぞれ任じた。そして、タウングーの太守シートウ・チョーティーンに彼ら三人兄弟の間に不和が生じないように見守ってくれるように、と頼んだ。

*次男タドー・チョーは Thadō: Dhamma Yāzā の称号で呼ばれることもある。

シントウエニョー (Shin-htwē:-nyo)

1471年にモン・タライン族の国であるハントワディにてはシンソーブ女王が他界して、その養子に当るダンマゼディ（学報22号，31頁）が王位に即いたが、このモン・タライン族の王とプロームの支配者が手を結んだことに対してビルマ系に属する領主たちはプロームに対して反乱を起こしたので、ビルマ王ティハトウは自ら赴いて、その暴動を鎮圧した。その際、王がプロームへ下ったことにちなんで、王は「Pyi（プローム）へ sun（下る）」即ち、ピースン（Pyi-sun）・ティハトウと呼ばれるようになった。そして、王のプローム遠征の様子を描いた当時尖兵隊長であったシントウエニョーは“Pyi-sun-maw-gwon:”を作詩し、maw-gwun: 詩の創始者としてビルマ文学史上にその名を輝かせた。

Thamein Bhayan: と Salonkyawgaung.

ハンワディ国のダンマゼディ王は彼の部下である勇者ミンニードン（Min:nyidon:）にタメイン・バヤンという称号と共にシッタウンの町を与えた。1477年、タメイン・バヤンはダンマゼディ王の命にて4万の兵士を引きいてシヤン州の山岳地帯を横切り、中国の国境に境界線を作り、その帰途、インワ王家のティハトウ王の三人の息子がヤメディンにてタメイン・バヤンの軍を迎撃し、彼を捕えた。その後、やがて中国軍は境界標を取去り、インワに朝貢を要請してきた。ビルマ王は中国に朝貢の要なしと云って拒絶したが、その際、両者より勇者一名づつによる馬上の一騎打によってそれを決することになった。そこで、インワの捕虜になっていたタライン族の勇者タメイン・バヤンと中国軍の勇者サロン・チョーガウンが一騎打を行ったが、その結果はビルマ側の勝利に帰した。それはちょうどミンガウン王の時代の同名別人の* タメイン・バヤンとガーマニが戦ったのに（学報22号，25頁）似ている。その後、タメイン・バヤンはビルマ軍に手厚

くもてなされ、ハンタワディへ帰って行った。

*（註）ミンガウン王時代のタメイン・バヤンはヤーザータリッ王の養子であった。この度のタメイン・バヤンは大臣であり勇者であった。もちろん別人であり、63年のへだたりがある。（ウ・ボチャ、p.154）

ドウティヤ・ミンガウン (Dutiya Min:gaung, 1480～1501)

ピースン・ティハトウ亡き後、王位継承者であった彼の息子ノーヤターが* ドウティヤ・ミンガウン王（第二ミンガンウ王）の名によって王位に即いた。

*ドウティヤ・ミンガウンは学報22号16頁に述べたパタマ・ミンガウン（第一ミンガウン王）に対し第二ミンガウンとして知られている。

王は文武就中弓術と馬術に秀いで、ちょうど今日のサーカスの乗馬のように17通りの乗馬の方法を人前に披露したり、作詩やろくろ〔旋盤〕の技術、等をもたしなんだ、とウ・ボチャは述べている（p.155）。また、王は学問、宗教にも専念し、それ故、学者や僧侶を敬った。特に彼の時代において注目すべきことはビルマ詩の急速なる発達である。当時の王たち、殊にドウティヤ・ミンガウン王は学者たちに大いに文学を奨励したことは云うまでもない。

当時の記録について

ビルマでは、その過去における国民の日常生活を跡づけるための証拠となるべきもの、例えば、数百年前の私信、人々の生活や服装を描いた図、銅製又は石造の像、荘園や僧院、宮廷に関する古記録等の遺物は最近に至って発見されてきたが、いまだ決して多いとは云えない。往古の事情を物語るものとしては若干の壁画と相当数の碑文があるが、その内容においては貧弱なものに過ぎない。棕呂の葉に誌された書き物類は多いが、棕呂の葉は朽ち易いものであるために古い時代のものは稀である。記録を保存するための適当な書庫が少なく、折角保存された僅かな書類すらも、かびや白蟻や戦災などのために煙滅してしまったのである。棕呂の葉の書類の大部分は宗教記録である。しかし、歴史関係の記録といっても、それはただ宮廷の年代記に過ぎないものであって、ハーヴィも、

“Were not writ for lowly churls, But for high dames and mighty earls.”

と言っている如く、それらによって庶民の生活を知ることは困難である。

ビルマ文学の興隆

ある民族が成長すれば、その民族の経済も成長する。国が平和で繁栄すれば、文学も発達する、とよく言われるが、ドウティヤ・ミンガウン王の時代になると、大きな戦さはなく、国は平和であったので、文学の面において、特に詩の面において著しい進歩が見られた。

全船的に見て、パガン時代の文学はあくまで幼年期を抜けきっていなかった。真の意味における文学の発達はインワ・タウンゲー時代を待たなければならない。インワ及びタウンゲー王朝時代は一般には古典詩の開花期であると言われている。パガン時代に作り上げられた基礎の上に立っ

て、この時代になると、特に詩文学が急速な発展ぶりを見せるのである。ビルマ文学史に名をとどめるべき詩人もこの時代に輩出している。

ビルマ王国が再統合される以前のインワ王朝の最後の数人の支配者はシャン土侯である。その時代の野蛮な混乱状態のうちにあって、唯一つの輝やく一点は純ビルマ文学の興りであった。それは静かな隔絶のうちにパガン文化が護られ、はぐくまれてきた僧院の産物であって、その文化の根底はパーリ文学の研究にあった。それ故、シャン族支配下の無政府時代に国民文学が誕生したということはビルマの民族主義が強固になったことを例示するものであることは意義なきことではなかった。その多くは詩である。ピンヤ、サガイン、インワ等諸王朝の時代を通じて書かれた有名な文学作品はピンヤ朝の五頭の白象主チョーゾワ王の“Kāgyin:” (盾をもって踊る時に唄われる詩歌)、同じくピンヤ朝時代の大臣サトウリンガ・バラのパーリ語辞典註解、及び同人の lingā 詩と yadu 詩、インワ朝のミンガウン大王の“Kyē:ze yadu”(伝書おうむを使わす詩)、シンマハ・ティラウンタの“Thanwega-hkan:-pyō”, “Hsutaung:-hkan:-pyō”, “Pārami-hkan: [gan:] -pyō”, シンマハ・ラタタールの“Bhūridat-lingā”, “Kō:-hkan: [gan:] -pyō”, “Hatti pāla-pyō”, シン・アッガタマーディの“Thuwoññathāmathissā-hkan:-pyō”, “Bhon-hkan:-pyō” “Ngayè-hkan:-pyō”, “Magghasō:-hkan:-pyō”, シン・ウッタマデョーの“Tawlā:”, ヤウエ・シントウエのパガン朝宮廷人の髪結の歌“Ahton:-amyeit hpwè”, 及び“An-gyin: 等の詩歌文学であった。

学報18号において述べた通り、1287年、パガンは中国軍の来襲の下に滅び、国は幾つかの小国分立の状態におち入り、半世紀以上も首都パガンにおいては外敵に対する政治的な武装闘争がくり返されていた。ただ地方都市では比較的平和であったので、多くの詩人は身の安全が保障される地方へ移って行った。パガンをのがれたこれらの詩人によって Yadu と呼ばれる新しい詩のジャンルが形成された。

当時の散文は主として仏教説話の翻訳乃至翻案であったが、それは仏陀本生物語を Shin Agga thamahdi の翻訳を始めとした仏教に関する物語の翻訳物又は釈義書から成っていて、16世紀初期に書かれている。しかし、その時代には、また、Shin Thilawuntha (1453~1520) は現存せる最古のビルマ編年史である Yāzawingyaw 年代記を生み出した。編集者シン・ティラウンタはマグウエ地方のタウンドウインダーの僧侶であったが、彼は“Pārami-ganpyō” という詩を書いたために破門された。彼の僧院長は彼が世俗的なものと見なされるような詩を書いたという理由で彼を僧院から*放逐したので彼はインワの都へ行き、そこでドゥティヤ・ミンガウン王によって彼のためにヤタナビマンと呼ばれる精舎を建ててもらい、そこで彼は詩作をつづけ、今日でも保存されているいくつかの詩と文法に関する論文を書いた。

* ウ・ペ・マウンティンは「シン・ティラウンタがタウンドウインダーのナッミーリン・シャードー僧院長に破門放逐されたことには確実な根拠がなく、彼は自ら進んでイワンへ行く許可を僧院長から貰った」と述べている (Myanma Sāpe Thamaing:, p. 40)

但し、遺憾乍ら彼の年代記は当代の事件にはほとんど関係がなく、それは主として伝説的な物語の集収であった。しかし、詩歌は散文に比してやや創作に近く、中には調子の高い小詩篇もある。同じ時代に、やはり僧侶の詩人でインワ王宮の顧問役として知られていた Shin Uttamagyaw

(1453年生れ) がいた。彼の有名な詩 Tawlä: は今日尚残存している。Tawlä: は森や山の情景を詠んだ詩であって、叙情詩的な性格が強い。taw=「森」。lä:=「行く；来る。」の両意義をもつ。従って、普通には、Tawlä: とは東へ西へと森や山を逍遙して、その情景を描写する詩であると解釈されるが、しかし、それより転義されて用いられる場合もある。シン・ウッタマヂョーの Tawlä: 詩は「森へ行く」という意味ではなく、仏陀がカピラワストゥ国へ赴かれる時の景色や気候の快適さを歌ったもので、その後発生してくる12の気候に関する詩 (Hse-hnit yādī hpwē myā:) の種子でもあり、その先駆でもある。

また、恐らくこの時代の作品であって、インワの宮廷にて女官たちによって用いられた55種の髪のかんざしに関して作られた angyin: 詩 (学報21号, 15~16頁) の集収が見出される。その作者はインワの王宮に任えた一女官で Yawe Shin Htwe と呼ばれる女流詩人であった。

Pyō, gabyā, lingā 等の詩で知られている *Shin Mahā Rahtathār や Shin Mahā Thilawuntha を始めとして、Shin Uttamagyaw, Shin On:Nyo, Kandaw Min:Kyaung:Hsayādaw, Shin Aggathamādhi, 等僧侶の文豪たちがこの時代に輩出したが、その他、僧侶以外の俗人のうちからも詩を作った者が多く pyō, gabyā, lingā の外に yadu, ēgyin:, mawgwun:, thanbain 等の詩や碑文研究が大いに発達した。この時代に発達したこれらの詩型は現在でも好んで用いられている。

*シン・マハー・ラタタールはモン・タライン系の僧侶であって、父はシンソーブ女王 (学報22号30~31頁) の甥に当り、バセインの太守ビニャー・エインの孫であり、母はタドー・ミンビャー (学報21号3~4頁) の娘の孫である。従って、インワ王朝の創始者の子孫として宮廷にて教育を受けた。なお、ハーヴィでは、彼がシヤン3兄弟の一人ティハトウ (学報18号74頁) の後裔であると記されている。

Shin Mahā Thilawuntha (1453~1520) と Shin Mahā Raṭṭhathār (1468~1529)について

Shin Thilawuntha と Shin Raṭṭhathār の篇を削る二人の知恵比べはビルマ文学史上においても有名であって、近代作家Min:thuwon は二人について、彼の “Sapeloka” p.20~p.28にて、次のように述べている。

ビルマ文学の黎明期にあって、有名な二人の僧詩人が現われたが、一人はタウンドゥイン出身の師僧 Shin Mahā Thilawuntha で、もう一人は首都インワの師僧 Shin Mahā Raṭṭhathār であった。Shin Thilawuntha は田舎で育ち、幼少の頃よりすでに詩作に秀れていた。ある日、この幼い少年は父に伴なわれて⁷ゲッピッタウンのナッ⁷ミー師僧のお寺を訪れた。その時、大樹の空ろから生れ出たばかりのさい鳥の鳴き声を聞いて、数人の二十才前の僧 (ဝဉ္စဉ်း) たちが、
"ဆော့ကုရ်း ဂဉ်းဗျေ: ၊ ဥကဉ်းဗျေ: ယဉ်း ဖျေ: လေး နုနယ်၊ ယနာ: ဘုယ်။" (玉子より生れた可愛いさい鳥、小さく幼い、可憐なものよ。)と歌を作っていた。その歌をきいて、自然の理法をよく理解していたこの少年はその歌に不自然なところを感じたのであろう。「貴殿たちの作った歌は正しくないよ。」と云うと、その少年より年上の僧たちは、「じゃあ、君だったら、どのように作るのか」と問い返した。少年は、
"ဆော့ကုရ်း ဂဉ်းဆော့ကုရ်း ဥကဉ်းဗျေ: ဖျေ: ဂေတုကုရ်းနုနယ်၊ ယနာ:"

၅၀၀" " と歌った。意味はさほど違わないが、(前者の歌と異なるところは " ဂဇ ချေ: " に対して " ဂဇ အေဘ် " " ဥမ ချေ: ယဉ် " に対して " ဥမ ပေါက်ယဉ် " となっている。 " ဂဇ ချေ: " は直訳すれば「胸の血」即ち、「自分 自身の子」を意味するが、 " ဂဇ အေဘ် " は「胸の下」から這い出てくることをいう。そこで " ဂဇ ချေ: " を用いているので " ချေ: ယဉ် " (生れる)が用いられているのであろうが「玉子から(自分自身の子が) 生れるはその少年にはまずく感じられたのであろう。また、 " ချေ: ခေး: နှိ နှိ " に対して " အေဘ် ဂေဘ် " 「羽毛(中) から出てくる」と言い直したのであろう) 自然にふさわしく作られたこの歌が気に入った僧たちはその詩作の才能に対してその少年を賞讃した。

後、この少年はナツミー寺院の師僧の元に弟子入りをして、 パーリ語及び仏典を学んだが、その傍ら詩作にもふけた。しかし、学問に対する燃える希望を抑えることができず、遂に首都インワに上ることにした。当時、インワにはすでに Shin Ratthathār というモン系ビルマ人の名僧がいて、ドウティア・ミンガウン王のもとにあって宮廷にて教育を受け成長していた。

シン・ティラウンタはセイロン帰りのシン・ラタタールのもとでパーリ、サンスクリットに関する学問を修めることに決めた。シン・ティラウンタが首都に達すると、都では「白象がインワの都に入った。」という噂さとなって拡まった。シン・ラタタールも白象(シン・ティラウンタのこと)に会いたいと思い、ある日、トウバヨン・パゴダを参拝した時、シン・ティラウンタに会って、次のようにあいさつをした。

シン・ラタタール「タウンドゥインの町では雨がよく降って、穀物の実りは豊かでしょうか。」
そのあいさつに対してシン・ティラウンタは雨がよく降って、農作物が充分であることをのべたが、シン・ラタタールは自分を農夫だと思って、このように尋ねられたのではないだろうか。自分の方からも尋ねてみようと考えて、シン・ティラウンタ「首都では僧侶たちは赤や黄色に染めた僧衣をまottoおられますか。また、祭りを見たり、花飾りをつけたり、香料を塗ったりしていますね。」(小乗仏教ではこれらのことは僧侶としての戒律を破ることになる。)

シン・ラタタールは答えられなかった。そうだと認めれば、自分も生臭き坊主に含まれるし、そうでないと否認すれば、事実と反することになり、嘘をつくことになる。それで、シン・ラタタールは黙ったまま静かに帰って行った。

また、ある日、シン・ティラウンタとセイロン帰りの師僧(シン・ラタタール)は出会い、問答をはじめた。

シン・ラタタール「ご坊は何故首都に参られたか。」

シン・ティラウンタ「私は師僧のもとで学問を修めたいために参りました。」

シン・ラタタール「この首都では私がセイロン帰りの僧です。私は硯石のようなもので、硯石の上では如何なる物(又は者)でもすり砕き、粉末にしてしまうので、遠くの町や村から学問を身につけるために来た人々は私のもとで粉末となって消え失せてしまうのです。」

シン・ティラウンタ「そうなる覚悟でございます。しかし、今や先生の足下に参りましたからに

は、硯石のことはさておき、*ミンモ山をも突き通すほどの原子力になります。」

シン・ラタタールは唯黙然としたままであった。

ドウティヤ・ミンガウン王もシン・ティラウンタの有名な噂さを耳にしていたのみならず、彼の ၄. 詩や ခေတ္တဝါ (ပုဂံ) (建白書的一种) のことをも心に留めていたので、彼に対する敬愛心の余り、彼に寺院を寄進した。そのお寺でタウンドウイン師僧(シン・ティラウンタ)も弟子の僧たちを教えた。

*ミンモ山は Mt. Meru とも呼ばれ、ビルマ文学史にはしばしば見出される山の名であるが、もちろん伝説上の山で、宇宙の中心に位置し、海底よりその頂上までは、Judsonの辞典(p.787)によれば、168,000 由旬ありて、その頂きは တုတ္တိယ (Tawutisa) と呼ばれて梵天界に属し、頂上は၊ ခေတ္တဝါ ဝိဇ္ဇာ 即ち、帝釈天(Sakra,あるいはインド教の Indra 神に相当す)の住居、また、半腹は四天王の住所となっている。須弥山、妙高、善積等の訳あり。

ある日の朝、托鉢の時刻にシン・ティラウンタとシン・ラタタールは偶然出会った。シン・ラタタールの方から相手に挑戦をはじめた。

シン・ラタタール「棕櫚の葉作りのうちわをもって、慌ててどこへ行ってこられたのですか。」

シン・ティラウンタ「師僧こそ、ご老体をひきづって重い足どりで、何故そのようなお尋ねになりますか。」

二人の間には隙をうかがって問答をはじめめる気配がうかがわれたが、しかし、この場合は物別れに終わった。

また、ある日、この二人の師僧は再び出会った。次の二人の師僧の問答も容易に理解できると信じる。

シン・ラタタール「タウンドウインの鹿はりっぱな角を立てていますね。」

シン・ティラウンタ「師よ、タウンドウインではジャングルに樹がたくさん繁茂して角が邪魔になって入りにくいため首都インワにて角を立てて振り廻すのです。」

ミンガウン王はいつも二人の師僧を宮廷に招いて、彼らが作る Pyo 詩に耳を傾けたものであった。ある日、例の如く王は二人を招待して、シン・ティラウンタの Pāramihkan: と Hsutaung:hkan:, また、シン・ラタタールの Bhuridat-zatpaung:hkan: 等の三冊を読経台の上に置いて、それらを一冊づつ順番に読ませた。それが終ると、王は「タウンドウイン師僧(シン・ティラウンタ)の詩には大きい太鼓の音のような響きがある。また、首都インワの師僧(シン・ラタタール)の詩には五つの楽器を一度に鳴らす音のような響きがある。」と云って、「寺院へ帰る前に貴殿たち自身を評するにふさわしい文を作ってくれ。」と願った。

シン・ラタタール「Taung(山)に穴をあけるのではなく Taung:(籠)に穴をあけるような錐やのみのようなラタタール。」

シン・ティラウンタ「Taung:(籠)に穴をあけるのではなく、Taung(山)に穴を打ちあけるダイヤモンドのようなティラウンタ。」とそれぞれ自分自身を評して帰って行った。

また、ある日、首都の師僧(シン・ラタタール)は一人の若い弟子をタウンドウイン師僧(シン

・ティラウンタ)のもとへ遣わして、「商人夫妻をお与え下さい。」という言伝をもってやらせた。タウンドウイン師僧(シン・ティラウンタ)は考えて、「商人というものは、夫(男)は荷を肩に担う(ဝဲဒ်: ခန့်) 妻(女)は頭上に荷をのせて運ぶ(ခန့်ခန့်)ものである。首都の師僧(シン・ラタタール)は「荷を肩に担う(者)」= ဝဲဒ်: + 「荷を頭上にのせて運ぶ(者)」= ခန့် 即ち、「棕櫚の葉」(ဝဲဒ်: ခန့်)を求めておられるのであることを悟って、棕櫚の葉を弟子の僧侶にもって帰らせた。

[註 "ဝဲဒ်: ခန့်" と "ဝဲဒ်: ခန့်" は発音も声調も同じであるが、ただ ဝဲဒ်: (肩に担うて) と ဝဲဒ်: (棕櫚)の文字が違うのみである。なお、棕櫚の葉は当時、文字を鉄筆にて刻むために使用されていたこと、と団扇に用いられていたことが記されている。]

シン・ラタタールの謎は直ちに解けた。

このようにシン・ティラウンタに対して種々な方法で知恵を試そうとするシン・ラタタールに対し、今度はしっぺ返しをすることによって快感を味あおうと思ったシン・ティラウンタはある日、生きた一匹の蛇を籠の中に入れて Hpō:·thū-daw〔白衣を着た僧の一種で、英語では“religious mendicant”又は、“religions layman”と訳されている。一応「寺僧」と訳しておこう。〕に託し、「御仏の遺骨でございます。といって、シン・ラタタール師僧に差し出しなさい。そうすれば、シン・ラタタール師僧の種族の出が偶然解るでしょう。そして、彼の驚きの叫び声をよくいつまでも記憶に留めなさい。」と言って、つかわした。〔「生きた蛇」(ခေတ္တ)と「仏陀の遺骨」(ခေတ္တ)とは同音異義語である。〕シン・ラタタールのもとへやってきた Hpō:·thūdaw (寺僧)は、「御仏の遺骨でございます、お師匠さま。」と云って、その籠を差し出したところ、シン・ラタタールはその籠を開けると、突然、生きた蛇がぬるぬると出てくるのを見て、思わず、
“ခန့်:” と夢中になって叫んだ。(ခန့်: = ခန့်ခန့် = ခန့်ခန့် = ခန့်ခန့်) はっと思って、シン・ラタタールは私の生れ素性を知るためにタウンドウイン師僧はいたづらをしたのだな、と感付いて、寺僧にむかい、「汝の師に伝えよ。“ခန့်:” という語はタライン語で驚きを表わす感投詞だ。それで、私の種族の出は解ったでしょうと伝えなさい。」と云って彼を帰らせた。

また、ある日、シン・ラタタールは“Bhuridatatzatpaung:pyo”を書くために寺院を出て、ウミンシュエグーへ行く道で、例の寺僧に出会ったが、彼は、「師僧さま、どちらへお出でになられますか。」と尋ねると、シン・ラタタールは「ボガワディ竜国へ行くのだ。」と答えた。シン・ティラウンタは寺僧よりよれを聞いて、首都の師僧の帰りを待ちふせて、次のように質問をするようにと寺僧に言葉を託しておいた。寺僧はシン・ラタタールの帰りを待って尋ねた。「師僧さまはボガワディ竜国からお帰りなされましたか。」

シン・ラタタール「そうです。竜国から今帰ってきました。」

寺僧「ダタラタ竜王の子マウンカーナリーは左右の目のうちどちらが盲目でありましたか。」

首都の師僧シン・ラタタールは困ってしまった。どちらの目が見えないか書物には書かれていない。

シン・ラタタール「マウンカーナリーは愛するタムッダザー・デウイ姫と共に女人部屋にいたの

で見つからなかった。」

と答えた。しかし、シン・ラタタールは知恵比べにおいて自己の敗北を認め、首都の師僧はインワから突然姿を消し、タレッケタラ国（プロームの都）へ下って行った。

註：Thilawantha はパーリ語で「鋭い剣」を意味し，Raṭṭhathār は「国の勇者」を意味す。

当時発達したビルマ詩の作詩法・形式・種類等について概略しておこう。

ビルマ詩は作詩技術の上から見ると、かなり複雑なものであるが、それはビルマ語自体のもつ特異性から発するものであろう。つまり、ビルマ語は声調を有すること。語彙がモノシラブルであること。という二つの要素がビルマ詩の特徴を決定する。押韻の場合、語末の母音の一致のみならず、声調の一致をも必要とする。それ故、ビルマ詩においては、必要な韻を得るためには、しばしば故意に、Poraṇa（古語・稀語等）を作詩技術として用いる場合が見られる。原則として、一行は四音節から成り立つというこの法則はほとんどすべてのビルマ詩にあてはまるものであって、溯行型の押韻形式をもっている点に特徴がある。例えば、一行目の四番目の語と二行目の三番目の語と三行目の二番目の語が韻をふむ。あるいは、一行目の四番目の語と二行目の三番目の語と三行目の一番目の語とが韻をふむ。そして、三行目の最後の語から再び同様の方法で新しく韻をふむ。もちろん、上述の押韻方法が原則であるが、他にも種々の変形的押韻方法が見うけられる。例えば、第一行目の四番目の語と二行目の二番目の語、あるいは、一番目の語とが韻をふむ、ということもある。これを図解すれば、

(A)の例

---+ | ---+ - | -+ ---

(B)の例

---+ | ---+ - | + ---

(C)の例

---/

--/-

-/- 2

-- 2 -

- 2 - 3

-- 3 -

- 3 - 4

- 4 - 5

-- 5 -

5 -- 6

6 ---

(UHpō:Ngwe: Tan:-myiṇ-gabyāhpwè-nī:-kyaṇ: p.25~28)

となる。

ビルマ詩の種類は行数、節数、の詩内容等によって区分される。当時大いに発達した Yadu, Lingā, Pyō, Eɡyin:, Mawgwun: 等五つの詩について簡単に説明すれば、

(1) Yadu について

Yadu は節数が1～3の比較的短い詩で、その内容は季節の推移に伴う自然の情景、祭の光景、作者自身の過去、等を歌ったもので、後には戦に関するものも現われるようになった。Yadu とは元来「2ヶ月間の季節」を意味する語である (Judson's Bur-Eng. Dict., p.835)。この Yadu 詩はインワ・タウングー王朝時代には大いに発展し、さらに種々の詩形式を生み出し、古典詩の開花期をむかえた。

(2) Lingā について

Lingā には二行詩と三行詩とがあって、各行共四音節から成り立っている。後述の Pyō, Eɡyin:, Mawgwun:等はいずれもこの Lingā の派生形である。内容は僧侶が俗人のために宗教、道德、倫理、日常生活上の教訓、及び、王家の人々を対象として作られたものである。前述の シン・マハ・ラタートルやシン・マハ・ティーラウンタが代表的な Lingā 詩を作っている。また、学報27号、72～73頁に述べたアナンタトゥリヤが死の直前、怒りを和らげるために作った “Amyet-pye-Lingā-lē:pod” は最も有名であり、学報12号、104～105頁の歌人不明の “Puppā:Nat-taung-hpwè-Linga は現存する最古のものである。

(3) Pyō について

Pyō は節数が任意で、各節三行から成り立っていて、内容は仏教主題を中心とした詩で、本生譚に基づく物語を扱ったものが多いが、後世、昔の学者や知識人の書いた作品によったものや詩人自身が創造したもの等も出現するようになった。初期の作品にはパーリ語を混えた文体が多い。

(4) Eɡyin: について

アラカン出身の詩人 Adūmin:nyo によって創始されたとされている。エーデンは節数が任意であって、歴史バラード風な詩である。初期においては、王又は王妃及びその父祖の栄光と功績とを讃えたものであって、王子、王女にきかせるために宮廷詩人によって作られ、通常何らかの楽器の伴奏によって吟じられたらしい。後には、戦争に参加した英雄の武勇談や凱戦の様子などを描いた内容で、戦争に出かける兵士の士気を高めるものとして歌われるようになった。このようにエーデンはその内容において宮廷や戦争に関するものが多いため、史的資料としても重要な存在価値をもっている。母音の「エー(e)」ではじまり、同じく「エー」で終る詩であるところから Eɡyin: 即ち、「エーの歌」と呼ばれるようになったとされている。

(5) Mawgwun: について

Mawgwun: の創始者は前述の “Pyi-sun-Mawgwun:” を歌った Shin Htwē:Nyo であると云われている。後世に伝えるべき記録、保存を必要とする事件を詩に歌ったもので、内容的には、宮廷、白象、御座船、戦争等王室関係のものや、パゴダの由来に関するものが多く、エーデン

同様史的資料として価値が高い。

ドゥティヤ・ミンガウンは即位の年にタダウーにてミンガラ・ゼディ（パゴダ）の建立に着工し、1499年にそれを完成した。それより以前、1481年に中の兄弟でサリンの太守であったタドー・ダンマヤーザーと末の弟でヤメディンの太守であったミンイエー・チョーゾワがインワに対し謀反を起したので、タウングーの太守シートゥ・チョーティンはヤメディンを撃とうとして、最初は勝ったけれども二回目は敗北し、捕虜になった。その息子シートゥンゲが後を継いでタウングーを支配した。

Min:byaing Mahā Thihathu (1485～1500)

ビルマ人、英人史家のうちでミンビヤンイ・マハーティハトゥについてふれている人は少ないようであるが、ウ・ミンハンのビルマ史（p. 218～219）には彼について次のことが断片的に述べられている。

ドゥティヤ・ミンガウン王は大そう可愛がっていた彼の長男が7才になった時にその息子に Mahā Thihhatur の名を与えて彼を王位継承者に任じた。そして彼が12才に達した時、即ち1485年に彼を即位させた。しかし、その頃はドゥティヤ・ミンガウン王もいまだ健在であり、従って、彼が父王ドゥティヤ・ミンガウン王と同時代に王位を競うことになり、世に彼を Min:byaing（王位を競う）Mahā Thihathu と称した。彼は曾祖父に当るモーニン・ミンタヤーデーの建立になるヤタナー・ゼディが地震によって破壊されたのをより堅固にするためそのパゴダを多数の象の似像壁にめぐらした。後世の人々はそのパゴダを Hsin-myā:- shin Zedi（「多数象の主パゴダ」の意）と名付けた。

Shwenan:Kyawshin Narapati (1501～1526)

ドゥティヤ・ミンガウン王の夭折によって、その末子 Min:Hswe は父王の王位競争者（Min:byaing）である長男の兄をさしおいて、父王の遺産を継いで王位に登った。王位に即くや、彼は新しい王城を建設したが、それが大そうりっぱな王城であったので、その建設者は Shwenan:Kyawshin（優雅な黄金の宮廷主）と名付けられ、ビルマ史には通例その名によって記されている。

即位の年、叔父でヤメディンの太守であったミンイエー・チョーゾワが他界したので、その家族及び兵力をシュエナン・チョーシン王は占有した。また、その後、王の競争者の子シュエ・ノーヤターの従者ガタウチャー（Ngathaukkyā という者がシュエナン・チョーシン王のすきを見て、王に刀にて切りつけたが、身体にはふれず、白傘の柄のみを切った。王は当然ガタウチャーを処刑した、という事件があった、シュエナン・チョーシン・ナラパティはよく功德を積み、戒律を守った王であって、彼が王として衆生に対する思いやり、憐愍の情の厚きことは次の記述によっても証明される。彼が王になる以前、パガンにあるシュエジゴン・パゴダに参拝していた頃、Hm. Yaz. (Vol. II, p.147) によれば、瀕死の状態にあった牛に憐れみをかけ、 “Min:gyi:

-hswe nwā:!”「わが友なる牛よ。」と親しく呼びかけ、それを死より救った。このことは彼が王として国民に対する思いやりに通じるものであることを示した一例であろう。

ビルマ人の美德の一つとして見なされることは動物、殊に彼らの生活に関係のある家畜等に対する慈悲、愛情の深いことである。もちろん、このことは仏教の影響によることは明らかである。近代ビルマ小説などのうちにも動物に対する愛情は明白に表現されている。実際に、仏教徒のビルマ人が生き物をいたわり、それを殺生するのを見ることは稀で、害虫をさえ殺さずに逃がそうとする傾向が見うけられるほどである。

シャン族の侵入

シュエナン・チャーシン王の時代にはビルマ王家のインワ王国も統一を欠き、支離滅裂になり、その勢力もとみに衰えて行った。タウンゲー、プローム、サリン等においても反乱が相次いで起り、シャン州へはその権力が全く及ばなかった。それまでにも、カレー、モーニン、モーガウン等のシャン族が蜂起して侵入し、今やその勢力が増大して、インワ王家もその侵入を防ぐことが困難になってきた。特にモーニン・サロン (Mō:hnyin:Salun) とその子ゾーハンボワはインワを苦しめ、ビルマ王家の断絶に拍車をかけた。ただその中であってオンバウンの土侯だけはシュエナン・チャーシンが他界するまでインワ王家に協力した。このような状態にあったにも拘らず王は国政に熱意を示さず、浮世に身をやつしていたらしい、という記録も見出される。

そのことは、ウ・オンマウンによれば、カンドー・ミンチャウン（寺の名）の一僧侶が数通の艶文書を王に差し示して、彼に忠告をあたえた (p.67) ことによっても明白であろう。もしこのことが事実であるとすれば、前述した「国民に対する思いやり…」とは相反する行為であるかも知れないが、所詮人間は完全では有り得ない。シュエナン・チャーシン王も有情の世に生きた人であるから。

シャン族の敵対行動は益々はげしさを加え、1524年、モーニンの土侯サロンは先づインワの北部を襲った。その後、シャン族は次第にイラワヂ河の西岸一帯をプロームの境界線まで占領し、プロームの支配者タドー・ミンソーはシャン軍に協力し、彼らと合併してイラワヂ河沿いにインワへ軍を向け、ビルマ軍とオンバウン土侯の同盟軍と戦ったが、ビルマ軍及びオンバウン土侯は抗し切れず、シンガウン・ウェッウインまで撤退した。これを知ったタウンゲーのミンチーニョーはインワの南の町々をシャン軍が到達する前に先手を打って占領した。その時、シャン族はプロームの支配者をインワにて即位させ、自らはそこの財宝をもってモーニンへ引きあげた。しかし、プローム王はインワには留まらず、僧詩人シンマハー・ラタートルと共に他の僧侶たちを連れてプロームへ帰って行った。その折に、シュエナン・チャーシンとオンバウン土侯はインワへ帰った。

このように国が混乱状態にあったので、インワの都からビルマ族の王家をはじめ、將軍や庶民一般がミンチーニョーの支配するタウンゲーへ難を避けてきたことによってタウンゲーの勢力は

いやが上に増して行った。(タウンゲーにおけるミンチーニョーについては次回の号にて述べる)。

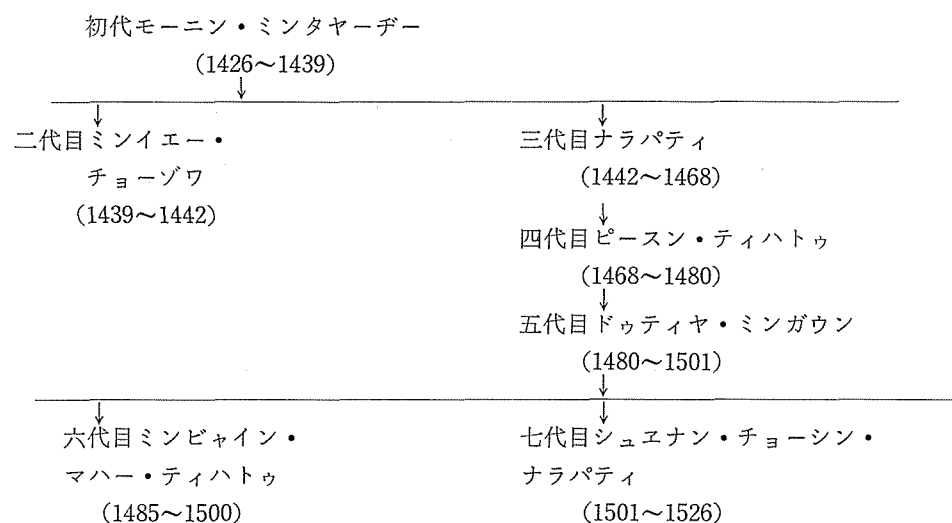
インワの都においての王の不在中、都の南の町々をミンチーニョーが占領したことを聞き知ったシュエナン・チョーシン王はその友軍であるオンバウン土侯と合して、タウンゲーの軍と戦うべく準備を整えた。甥であるミンヂー・ヤンナウンがそれを止めようとしたが、王は聞き入れず、タウンゲーに軍を進めた。一ヶ月ほどタウンゲーを包囲したが、それ以上の攻撃力がなかったもので引きあげざるを得なかった。

しかし、モーニン土侯サロンとその子ゾーハンボワはインワに軍を進めたのでシュエナン・チョーシンは都を守ることができず、オンバウン土侯の軍と合併すべく出立しようとしたが、途中、ゾーハンボワの軍と出遭い、交戦中、シュエナン・チョーシン・ナラパティ王は象の頭上にて敵弾に当たって倒れた。時は西暦1526年(ビルマ暦888年)であった。モーニン・サロンはインワを占領し、息子ゾーハンボワをインワの王位に即け、彼自身はモーニンへ帰って行った。ここにおいてビルマ王家は断絶し、第二次シャン時代が現出するに至った。

Shin Htwē:Nathein

シントウエ・ナーティンは詩才のある人で、僧侶ではなく、シュエナン・チョーシン王の兄 Min:Tayā: (Min:byaing Mahā Thihathu, 即ち、ドゥティヤ・ミンガウン王の競争者の別名) に仕えたが、ミンタヤーの息子シュエノ・ヤターの事件のためタウンゲーへ逃避していたが、タウンゲーにて没した。彼は Yadu 詩人として有名である。

インワを支配したモーニン王家は7代続いたのであるが、それを図で示すと、



ビルマ族王家の名前について

ビルマ史を通読する際に最もややこしい複雑なことの一つは人名である。人名についてはこれ

までも折にふれ述べてきた如く、ビルマ人には性がないため同名者が多い。西洋人の名前と比較すれば、例えば、Robert Louis Stevenson という名前の場合、ビルマ人には Robert Louis に相当する名まではあるが、Stevenson に相当する性が見当たらない。従って、名前で見ると父子の関係は全く解らない。また、女が嫁入りをして名前を変える必要はない。ところが、昔の王家においては名前の区別が大そう困難な場合がある。同名者の時代が距っている場合は理解し易いが、時代が同時代又は接近している場合や、同名の二人の人物が性格や業績が似ている場合、また、王族や大臣高官には二つ又は三つの別名や称号をもっていて、それらが他の王を襲名している場合、等種々判断に困難が生じる。このことは他国の歴史と異なったビルマ史独特の複雑さであろう。そのため王のあだ名が本名よりもよく知られ、歴史上にも称号やあだ名が用いられている例が多い。それら幾つかの例を挙げるならば、

一般には Kyanzitthā: チャンジッターの名で知られているパガン朝44代目の王の名は碑文では ၵၵၵၵ Htiluin Mañ ティルイン・マンと記されているが、この Kyanzitthā: という名も後世の人、または当時の人が呼んだ綽名よりきているのではなからうか。それには二つの意味が伝えられていて、一つは「Kyan (生き残った)+ zitthā: < sitthā: (兵士)」の意味 (学報16号, 57頁) であり、もう一つは「Kyan < 古形 Kalan (役人)+ sitthā: (兵士)、即ち、「武人」を意味している。

また、パガン朝46代目の Narathū 王を碑文では ၵၵၵၵ Imtaw Syaṇ と記されているが、彼の綽名は Kalā:-gya-min: (インド人によって亡ぼされた王) と呼ばれ、歴史上でもその名で知られている。

次に、碑文では ၵၵၵၵ II Caṇsū II と記されているパガン朝48代目の Narapatisithū 王の後を継いだ49代目の Zeya Theinhka 王は別に三つの呼名をもっている。碑文では ၵၵၵၵ Nātoṇmyā, 即ち、現代ビルマ語では Nan:taung:myā: (幾度も乞い願うてなった王) の意 (学報17号, 80頁)。もう一つは Uzanā (パーリ語 Uccanātha (ucca= 気高い, 優れた)+ nātha (礼拝すべきもの, 王, 仏) より転じた名)。他のもう一つは Htī:lomin:lo (白傘も先王も望んだ王) の意。本名を加えて、これら合せて四つの名をもった王は最後の名前の Htilominlo 王としてビルマ人の間では広く知られている。

それから、是非とも挙げねばならぬ綽名をもったパガン朝の王は52代 Narathihapate で、パガン王朝末期の碑文では ၵၵၵၵ IV Caṇsū IV を ၵၵၵၵ Tarukpliy, 現代ビルマ語の Tayo tpyē:-min: (中国軍に追われて逃げた王) として歴史上有名である。

尚インワ時代では、ミンガウン王時代の Thamein Bhayan: とダンマゼディ王の部下の Thame in Bhayan: との場合 (前述8頁) もある。二人ともモン系に属する。「危険なき支配者」を意味する。(学報22号, 25頁)

そして最後の例として、モーニン王家4代目の Pyisun Thihathu がもし本名である Mahā Thihathu(r) を名乗るとすれば、6代目の (Min:byaing) Mahā Thihathu(r) とは時代が接近し

ているため間違い易い。

上述したような例はなお枚挙にいとまがなく、書物によっても本名を用いている場合、称号を用いている場合、綽名を用いている場合、また両方を用いている場合等がある。また、Thihathu や Narapati という名は王家には特に多く、ビルマ族のみでなく、シャン族にも見出される。殊にインワ時代には名前の複雑さが甚だしいように思われる。

以上、ビルマ人の名前について述べた通り、ビルマ文のある一節を読んだだけでは、王家出身者の名が某の Thihathu 又は Narapati に相当するのか理解に苦しむ場合が時々ある。もちろん、その事件又は内容がよく知られている場合は名前が書かれていなくても「彼」だけでも、又は主語が無くても誰某であるかが明白である。

‘Ga-nge-thon:-hku-ok-shit-htu’ という言葉はビルマ人がよく口にするのであるが、その意味はビルマ文字の ဝ はビルマ数字の 8 と同じ形で、3つの ဝ は ဝ ဝ ဝ =ビルマ暦888年、即ち、西暦1526年で、インワ王家のシュエナン・チョーシン・ナラパティ王、プローム王タドー・ミンソー、ハンタワディ国王ビニヤー・ランの3名の大物が共に他界した年であって、それは恰も Ok-shit という果物（ベンガル産マルメロ）が打砕かれたようにビルマ国が支離滅裂の状態になったことを表わす。直訳すれば、「thon:-hku （三つの）Ga-nge ဝ （というビルマ文字）は ok-shit （マルメロ）が htu （打ち砕かれた）如くである。」を意味する。

第二次シャン時代

1312年よりはじまったピンヤ王家と1315年よりはじまったサガイン王家が共に1364年にその終りをつげた（学報20号，165頁）が、それら両王家はシャン系に属した王家であったので、その時代は第一次シャン時代と呼ばれたが、今や1527年（ビルマ暦888年）ゾーハンポワがインワの王位に即くや、再びシャン族による支配がはじまって、これを第二次シャン時代と呼ばれている。この時代は1527年より1551年 Mō:byè-narapati が退位するまでの25年間である。

インワ国においてはシュエナン・チョーシン・ナラパティ王の即位の頃より、モーニン、モーガウン、カレー、オンバウン等のシャン土侯たちの権力が増大して、インワでは第二次シャン時代に入ろうとしていた。ビルマ族もモン族もモーニンのシャン王家に対して競うものはいなかった。プローム王もそれに服従して、シャン王家に協力する態度を取り、今やシャン王家に対抗するものはいなくなった。

Thohanhpwā: (1527~1543)

ゾーハンポワはシュエナン・チョーシン王亡き後、1527年インワの王位に即いたが、彼はMō:hnin:Salon の子であって、シャン族の血統をひいていた。ゾーハンポワはその性質が残忍性を帯び、仏教を信奉しないのみならず、それを嫌悪した。ウ・ボチャーの記するところによれば（p.158）、彼は、「パゴダは何ら仏法に関りなし、それは唯ビルマ族が貯えた宝物庫に過ぎない。」

と放言し、更に仏教僧には妻も子もなく、その弟子を養っていて、いつ反乱を起すかも知れないと考えて、僧侶たちを滅亡せんと計り、自ら仏教を信ずるように見せかけて、1539年インワの都に近いタウンバルーの原に大供養会を催して多くの僧侶を招待するといっぴ呼び寄せ、兵士たちに彼らを襲わしめた。インワ、サガイン、ピンヤ等の各地から集った僧侶の数は1300名、そのうち360名は兵士の兇刃に倒れ、その他の僧侶は遁れてタウンゲー及びプロームへ走ったという。またその後、仏典を焼払い、パゴダを取り毀してその金・銀を掠奪した。次いでゾーハンボワはビルマの大臣高官たちをも虐待した。それ故、ビルマ人はシャン族ゾーハンボワに宗教破壊者という極印を押した。

ビルマ国内の分裂

このようにインワにおいてシャン族の支配すをところとなると、ビルマ系に属する者たちは支離滅裂となり、国は混乱状態におち入った。インワではゾーハンボワが支配し、プロームではビルマ族のナラパティ、ハントワディではタライン族の王トゥシン・タガー・ヨッピ (Thū-shin-Tagāyutpi)、タウンゲーではビルマ王タビン・シュエティ (Tabinshwehti:) 等がそれぞれ覇を競っていた。当時、ビルマ人はインワには住めず、また、住むことを欲しなかった。そこで彼らはビルマ族の王が治めるタウンゲーへ移って行った。

モーニン・サロンの終末について、ウ・ミンハンはプローム事件のなかで次のように述べている (p.230)。

プローム事件

1532年にモーニン・サロンはその息子今はインワの王となったゾーハンボワと共にプロームへ大軍を以て攻め入った。プローム王ブイントエ (Bhuyin Htwē:) は長くもち耐えることができないことを知って、都を去り、モーニン・サロンに朝貢した。その間に、味方の兵を募り、都へ上ろうとして、ディペインに達した時、兵を解散させた。と記されているが、その理由は書かれていない。恐らくモーニン・サロンがミェドウにて彼の高官たちの謀叛によって亡びたことをブイン・トエは知ったからであろう。モーニン・サロンの後をその子サロンゲ (Salun-nge) が継いで支配した。

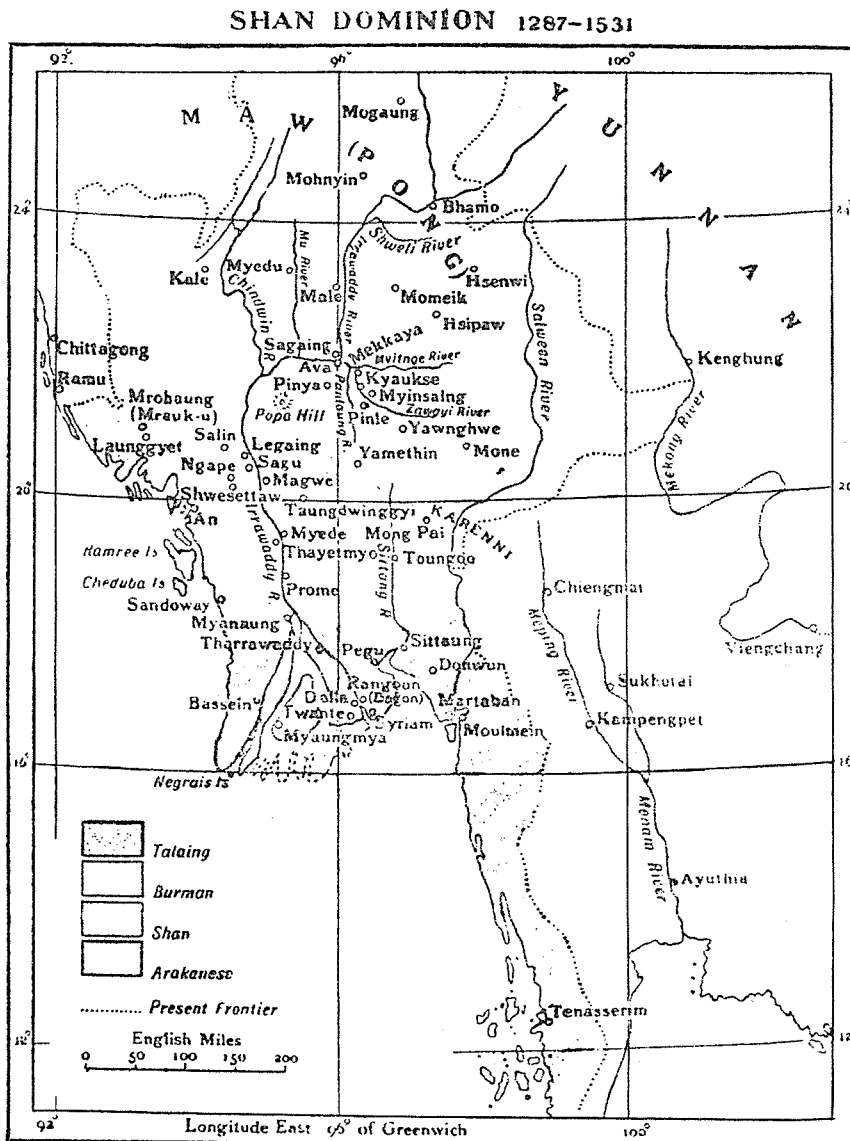
なお、この機会にプロームにおいてはブイン・トエの息子は父王の不在中に、ナラパティの号によって都を支配した。そして、約5ヶ月を経て、父王が帰国したが、都城に入ることを許されず、城門は閉ざされた。ブイン・トエ王は都の北にあるナウイン河の辺りの仮小屋に留っていたが、健康すぐれず、そこで他界した。

プローム王ナラパティの王妃は祖父タドー・ミンソーがインワより連れてきたティリボントウエツ (Thīri-bhon:-htwet) といっぴ、インワ王シュエナン・チョーシンの娘に当るのである。

1538年、プローム王ナラパティとモン国王を廃位されたタガーユッピ (Tagāyutpi) たちはタ

ウンゲーのタビン・シュエティ王がプロームに攻めてくるのを攻守すべく軍を進めたのでゾーハンボワも水路によってプロームへ軍を進め、タビン・シュエティ王と戦ったが、利あらず、撤退した。その同じ年にモン・タライン族の王タガーユッピとプローム王ナラパティは他界し、プロームではシン・タイエツ (Shin Thayet) が“Min:gaung”の号を名乗って支配した。

1541年、タビン・シュエティはプロームを攻略したので、ゾーハンボワを含めてモーニン、モ



ーメイ、オンバウン等の土侯たちは水陸両路より下り、タビン・シュエティ及びバインナウン等の軍と戦ったが、破れて後退した。やがて、タビン・シュエティはその翌年1542年にプロームの

都を占領した。

シャン土侯たちがプロームを援けるためにこのように協力したことはその後の問題を考える上に役立つであろう。

タビン・シュエティに破れたシャン土侯たちは不満のあまり、インワのコン^アマインとバモー、ニヤウンシュエ、オンバウン、モーメイ、モーニン、モーガウン等7名のシャン土侯はタビン・シュエティが勢力を振うプローム、タウングー、ハンタワディ等を陥れんとして水陸両路より大軍にて攻め寄せた。タビン・シュエティは義兄弟に当るバインナウンと共にハンタワディより水陸両軍の部隊を引きいてプロームに向い、シャン軍と戦って彼らを四散させた。また、ハンタワディの軍はバガンまで進撃したが、シャン土侯の軍はそれを防ぐこともできなかった。

この戦闘をシャン土侯たちが協力してプロームを助けようとしたが、それは彼らに対するタビン・シュエティの勢力を阻止せんとするためのみならず、ビルマ全土をシャン族が統一支配して、永遠のシャン時代をそこに建設せんとする野望がうかがえないであろうか。しかし、タビン・シュエティがバインナウンと共にシャン軍を撃ち破ることができたことは、今後において、シャン族の勢力が衰微し、遂には消滅して、ビルマ時代、即ち、ビルマ族による大国を建設せんとする将来の兆であるというべきである。

(タビン・シュエティの別名がミンタヤー・シュエティとも呼ばれている。尚、タビン・シュエティ及びバインナウンについては次回の号「タウングー王朝時代」において後述する。

Min:gyi: Yan-naung

シュエナン・チャーシンの甥に当るミンダー・ヤンナウンはインワを逃れたが、モーニン・サロンに連れ戻され、彼の息子ゾーハンボワの守り役として領地を与えられた。しかし、彼は潔白で真に心からビルマ族を愛した人であったので、タウングーやプロームにいるビルマ人たちと連絡をとりゾーハンボワを撃つべく画策した。遂にその機会は到来した。

Hm. Yaz. Vol. II, p.156~7, によってそのいきさつを述べると、

1543年にゾーハンボワはマノーヤンマという荘園に仮宮殿を建て、一時そこに住まうとしていた。ミンダー・ヤンナウンはビルマ人の役人たちに彼らの剣をその仮宮殿の一室に秘かくかくさせ、「私が立上れば、諸君たちはそれらの剣を取り出してシャン族の高官たちを切れ」と申しつけておいた。仮宮殿においてミンダー・ヤンナウンの案内に従って、ビルマ族の一群とシャン族の一群が武器を持たずに服装をととのえてそれぞれ王に伺候した。その時、ミンダー・ヤンナウンは剣を手に入れようとして、優れた剣について王に話しをもち出した。ゾーハンボワは、「ナラパティ（恐らくシュエナン・チャーシン・ナラパティのことであろう）の剣は象の頭上より敵を切った時、人と象鞍もろ共象をも傷つけたということだが、その剣を知っているか。」と尋ねると、ミンダー・ヤンナウンは、「知っています。」と答えて、王が常に佩刀していた剣をとって、「この剣であります。」と云って、王にそれを手渡すふりをして、ゾーハンボワに切りつけた。ゾー

ーハンボワはその場で相果てたが、シャン族たちが立上ろうとする隙にビルマ人たちはかくしてあった剣をとり出してシャン族たちを切った。ビルマ族のシャン族に対する恨みがいかに骨髓に徹していたか、次のウ・ボチャの記述によってうかがうことができる。

ゾーハンボワが切られた時、彼がもたれかかっていた象竹の柱と床の竹板五本をも切ってしまった。

ゾーハンボワが亡びたので、人々はミンデー・ヤンナウンに統治を求めた。しかしミンデー・ヤンナウンは、「私はただ不正な支配者を下したまでである。私自身が国の支配者になることを望んではない。」と云って、彼の主人ナラパティ王と縁続きであるオンバウン・クン⁷マインに王位をゆづった。一年を経て、彼はこの世を捨て、チャウセ地方の一精舎に隠遁してその余生を送った。ハーヴィも云っている如く、今日では僧院生活は逃避の一形式と見なされているけれども、当時の血醒い時代においては、僧院こそは高潔の士にとって唯一の安住の場所であった。

第二次シャン時代の終末

その後、オンバウン・クン⁷マインの子*モービエ・ナラパティ王（1545～1551）の時にサガインのシートウ・チョーティン・ナラパティ（Sithūkyawhtin-Narapati）というビルマ王家に属する一人がモービエ・ナラパティを攻め、インワを降して王位をビルマ族の手に復した。時は1551年、ここにおいてシャン族がインワ王朝を支配した25年間の第二次シャン時代は終りを告げた。

*ウ・ミンハンによれば（p. 234～35）、サガインのシートウ・チョーティン・ナラパティに攻撃されたモービエ・ナラパティはインワの王位をすてて、バインナウンのもとへ身をかくした。

シャン時代の区分について

シャン時代を一期及び二期、または、第一次、第二次と区分する代りに、ウ・ティンウが指摘する如く、シャン時代を一括して、1287年～1531年とする方が明白であるかも知れない。何故ならば、1287年はパガン時代のナラティハパテ王が亡び、パガン王朝の末期頃よりシャン三兄弟を発端としてシャン族がビルマ本土へぞくぞくと入り込み、次第にその勢力の拡張を計っていた時期である。そして、ピンヤ、サガイン、インワ等の時代を経て諸王家及び諸州の太守にシャン族またはシャン系ビルマ族が大半を占めていたことを考えれば、上述通り一括してシャン時代と呼ぶ方が適当ではないかと思われる。しかし、ビルマ族が没却されたのではなく、シャン時代には諸国諸州が互いに勢力拡張のための闘争を繰返した。それらのうちインワ、ペグー、タウングーが勢力最も強く、この三国のうち、インワとペグーはシャン時代を通してずっと戦い、15世紀中葉に至ってようやく両国の勢力が衰え、タウングーの勢力が勃興した。16世紀にはタウングーはついにビルマ国を指導する地位に立った。1531年はタウングーの長ミンチーニョーが亡くなって、タビン・シュエティ王が彼にとって代る年であり、ビルマ族によるビルマ国の支配がはじまるのである。

また、それより20年を経て、インワ王朝でもシャン系に属するモービエ・ナラパティを追払っ

て、ビルマ族王家に属するシートウ・チョーティン・ナラパティが支配することになり、シャン族の勢力は衰えて行った。

16世紀の初頭にはシャン族は上ビルマの支配権を完全に掌握していたことはインワの長^{おさ}には彼らの故地であるシャン諸州の名に因^{ちな}んで命名された者が幾人もいることによっても理解できる。

今やインワ王朝* 第17代目ナラパティ王が支配し、3年を経た1554年にタウンゲーのタビン・シュエティ王とバイン・ナウンはインワを占領して、ナラパティを逮捕し、ハントワディに送った。

*インワ王朝17代目のナラパティ王はもちろんモービエ・ナラパティをインワより追放したシートウ・チョーティン・ナラパティのことであるが、彼は、ウ・ミンハンによれば (p. 253~6), 偉徳すぐれ、真実性、勇気、洞察力をもった王で、国民に愛された。また学問を重んじ、朝夕には必らず仏典の朗読と祈りを繰返した、とのことである。しかし、時代の推移は如何ともし難く、捕虜の身となってペゲーのバインナウン王のもとへ送られた。

第一次インワは1364年から1554年までの190年間、タドー・ミンビヤーからサガイン・シートウ・チョーティンと呼ばれるナラパティに至る27代の王が続いた。ここにおいて、インワはもはや王が支配する都ではなく、王の代理の治める小都市になってしまった。従って、タウンゲー、またその後にはハントワディが王の君臨する都となるのである。即ち、タビン・シュエティとバインナウンがインワを従がえてタウンゲーを支配することになった。このようにインワが王の代理の治める都として存在する期間は1554年より1594年まで(王不在の4年間を含めて)43年間であった。1597年に至ってはじめて再び王の在位する都に返るのである。今や第一次インワ王朝が終り、王代理の都として43年間は首都はタウンゲーに移るのである。

ビルマ人が現在のビルマの地域に定着してから10世紀余り、その歴史は決して古いとは言えないが、ビルマ族がやや定着する前にはビルマでも最も肥沃であって、国の中心となるべき諸大河のデルタ地帯はモン・タライン族によって占められていた。また、移住後も、シャン族の支配(1287~1531)、アラカン族の反抗もあり、これら各種族の征服に苦心している。けれども、一面実はこれら諸種族の弾圧下にあったということが、ビルマ人をしてますます団結を固め、民族国家組織完成への気運を高めたのであって、この意味で民族意識の強烈なビルマ人の今日あるは、当時の民族的諸事象にその淵源があるとみても差支えあるまい。

参 考 文 献

- U Hpō: Kyā: :Myanmā Yāzawin Akyin: (1937)
- U On Maung: Myanmā Yāzawin Thit, Vol. II (1952)
- U Tin U: Myanmā Naingngandaw Thamaing: San Pya (1957)
- U Min Han: Myanmā Naingngandaw Hket-laik Yāzawim (1937)
- : Hman-nan: Mahā Yāzawim, Vol. II
- U Hpe Maung Tin: Myanmā Sāpe Thamaing: (1955)
- U Hpō: Ngwe: Tan: Myin Gabyā Hpwè Nī: Kyan: (1955)

- Zawgyi & Min: Thu Woñ: Sāpe Loka, Vol. I (1949)
- G. E. Harvey: Outline of Burmese History (1947)
- D. G. E. Hall: Burma (1950)
- Maung Htin Aung: Burmese Drama (1947)
- Г. П. ПОПОВ: Бирманская Литература, МОСКВА (1967)
- ハーヴィ著 } : ビルマ史 (1943)
五十嵐智昭訳
- アーサー・フエヤー著 } : ビルマ史 (昭18年)
岡村武雄訳
- U Maung Gyī: :Tabin Shwehti: Wutthudawgyi: (1958)
- 著者不名: A Gnide to the History of Burma
- Dr. Than: Htun: :Myanmā Kyauk Sā (Pagan Hket) (1957)
- Jndson: Bur-Eng Dict. (1966)
- U Tin Swe: Porāna Kahtā Abhidhān (1954)
- U Manng Gyī: :Pāli Abhidhān-hkyut
- W. S. Cornyn } : Burmese Glossary (1958)
and
J. K. Musgrave }
- 水野弘元著: パーリ語辞典 (1968)
- 禿氏祐祥著: 仏教辞典 (昭37年)
- 片山眞吉著: 南方民族運動史 (昭17年)
- 大野徹著: ビルマ語文献解題 (1964)
- U On: shwe: That-pon Abhidhān (1956)